

# ジェイムズの感覚論

## 序

かつてより哲学の伝統には感覚を頭痛や耳なりのように何の価値をも持たない単なる主観的变化として、あるいは理性の純粹無垢な目を塞ぎ、我々を認識上の誤謬へと導くものだとする思想が根強く残ってきた。ジェイムズは感覚が哲学の長い伝統の中でしばしば不当に、しかも誤って扱われてきていると主張する。次の文にはそういった従来の哲学的な感覚論に対するジェイムズの強い不満があらさまに表現されている。

ロックの後継者達は感覚に関してまるで有り得ないことを追求してきた。そのような主張に対してもう一度はっきりと感覚と一緒に組み合わせるより知的な心の状態を構成する心的素材などではあり得ないということを主張しなくてはならない。プラトンの初期の弟子たちは感覚の存在をいやいやながらも認め、その取扱は肉体的で非認知的、そして下品なものか何か

## 良 峯 徳 和

を扱うようなひどいやり方であった。最近のプラトン主義者達は感覚を存在の世界からまるっきり締め出してしまおうとしているように思われる。

いずれにせよ哲学の歴史は感覚をそれ自体で独立した認識の単位としては認めてこなかった。感覚とは悟性、理性といった高次の心的機能にとつて、感官を通じて外界から送られてきた単なる加工材料であったり、多数集まらなくては対象についての認識を形成することができないような不完全な心的存在として前提されてきた。

これに対し、ジェイムズは感覚に固有の認識機能を認め、それが我々の心的生活全体に果たす役割、重要性を積極的に肯定しているとする。そのため当時の心理学理論の中でもひととき異彩を放つジェイムズの感覚論は、同時に当時の心理学者の主流を占めた感覚主義、主知主義の心理学を批判、克服しようとして生まれきたものである。本論はジェイムズの感覚論がいかなる理論的背景から生まれてきたのかを明らかにすることにより、それがジェイムズの内

理学の構想全体の中でいかなる重要性を担っているかを論ずるものである。

### 一 心的原子論批判

感覚と知覚とは日常の場面でしばしば混同されているにもかかわらず、伝統的な認識論でははっきりと峻別されてきた。すなわち知覚には対象を何物かとして認識するという機能が含まれているが、感覚には対象認識が含まれていないと見なされてきたのである。ジュイムズは対象認識を一切含むことのないただの感覚のことを純粋感覚と呼ぶ。しかし純粋感覚とは一種の抽象であり、現実には相対的にしか存在しない理論上の概念である。ジュイムズは次のようにいう。

認識の対象が次第に「熱い」「冷たい」「赤い」「騒々しい」「痛い」といった単純な性質として他の事物とは無関係に知られるようになればなるほど、その時の心の状態は純粋感覚の状態に近づく。逆に他の事物との関係が増せば増すほど、つまり対象が分類され、位置づけられ、大きさも認識され、記憶と比較され、ある働きを付与され、特定の対象としての認識が進めば進むほど、その時の心の状態は知覚の状態となり、そこにおける感覚の果たす役割が相対的に減少する。

感覚が現実には相対的な存在でしかないということからさらにジュイムズは従来の伝統的な感覚と知覚との区別もまた相対的なもの

であり、両者の違いは単に前者が対象に関して有する内容の極端な単純さにあるだけという。純粋感覚の存在を否定することにより、ジュイムズは当時の心理学の主流を占めていた感覚主義心理学の根本的な前提を否定しようとした。十九世紀の心理学を支配した感覚主義の源泉はすでにロック、ヒュームらの十七世紀イギリス経験主義の哲学者達の思想に窺える。ヒュームは心に関する原子論的な理論モデルを提唱したが、ジュイムズはヒュームのことを心の「原子論の勇士(hero of the atomic theory)」と呼んでいる。それ以降、高次の意識状態はより低次のしかもそれ自体はそれ以上分解することのできない単純な心的要素からできているという心的原子論の考え方が経験主義心理学者の共通の前提となったのである。その根底には一切の物質とその現象は元素・原子といった基本要素の結合、分離によって生ずるといふ自然科学の原子論的前提が、心理現象についても同様に適用できるという臆見、および心理学が科学となるためにはそのような前提を進んで採用すべしという要請があったと考えられる。

ジュイムズはこのような前提に基<sup>(1)</sup>いてとられた心理学上の方法論を一括して「総合的方法(synthetic method)」と呼ぶ。それは「単純な感覚」の観念から出発して、その観念を各々原子と見なし、あたかも煉甘瓦を集めて家を立てるように、その原子の「連合(association)」「集結(integration)」あるいは「融合(fusion)」等によって、高次の心理状態を構成しようとするのである。ジュイムズにいわせると、そのやり方は自然科学の教科書と同じ形式で論ずることができるため、「教授上の便宜」は持っている。しかしなによ

りもそれは、直接には知ることのできない想像上の「単純観念」から出発し、その相互作用を論ずるわけだから、何よりも根本的に疑わしい、しかもそれは理論上で何とかつじつま合わせをしようとするため、かえって人々を錯誤に導くことになる。ジェイムズは批判する。そのような方法を採用することは心理学研究における経験的方法を放棄してしまふことに等しく、ひいては心理学が経験科学になる道からかえって遠ざかることになる。ジェイムズはいう。このように感覚主義心理学に対するジェイムズの批判は非常に手厳しい。

それに対し、ジェイムズは「感覚」を架空の要素的心理状態としてではなく、あくまで現実で経験できる心的状態として把握すべきであると主張する。日常よくなれ親しんでいる具体的な内的事実から研究を始めよ、経験的に確証のない前提は不用意に持ち込んでほならないというのが、ジェイムズの心理学者としての根本方針であった。これはジェイムズの「意識の流れ」論の中の中樞をなす方法論であり、それを自ら「分析的方法 (analytic method)」と呼んでいる。<sup>(4)</sup>

単純な青、単純な痛み、単純な甘さなどは日常経験の内には存在しない。ある経験をたとえそのように表現したとしてもそれはあくまでも比喩的、もしくは相対的な意味でいっているにすぎない。しかし一方で、いかなる色調も三原色の組合せの度合によって作り出されることを我々は知っている。合成調味料の発達が教えてくれるように、味や臭いはさまざまな化学物質が感覚器官に与える複合的な作用である。とすれば感覚主義者のようにいかに複雑な感覚的経験であれ、それが複数の単純な感覚者素から構成されていると考え

ることは自然のように思われる。ジェイムズはこれに対し次のような例を挙げ、感覚主義者の主張には誤謬が含まれていることを指摘する。

例えばレモネードはレモンの絞り汁と砂糖と水からできている。レモンは酸っぱく、砂糖は甘い。とすればレモネードの甘酸っぱい味はレモンの酸っぱさと砂糖の甘さからできている。このような説明は日常でもごく普通に使われるので、ほとんどの人は何の疑問も抱かずに受け入れてしまう。しかし、レモネードがレモン汁と砂糖からできているということ、レモネードの味がレモンの味と砂糖の味からできているということとは厳格に区別すべき別の事柄である。レモネードの味はレモネードの味としてそのまま一挙に感じられるのであって、その際我々は決してレモンの味と砂糖の味の両方を感じているのではない。たとえそのようにことばで表現したとしてもそれはその際に我々がレモンの味を想起する、あるいはレモンの味との類似を見いだすということであって、レモンと砂糖の両方の単純な味を別個に経験したうえで両者を総合してレモネードの味を構成するということとは異なっている。これは対象の結合を感じの結合と混同することから生じた錯誤である。ジェイムズは「緑色の感覚が青と黄色の感覚からなる」という感覚主義の説明についても同様の反駁を行っている。<sup>(5)</sup>

以上から明らかなようにジェイムズの感覚主義批判の第一点は、心理学の学象領域が心的経験、なによりも我々が直接に「感ずる (Feel)」という意識上の経験にあるにも関わらず、感覚主義者は感覚的経験を説明する際にその根本前提を無視し、物と心との二つの

カテゴリーを根拠なく混同した点におかれていたのである。

## 二 主知主義批判

いま仮に感覚主義者の主張を受け入れて、高次の知覚経験が要素的感覚の相互に結合し、複合したものだとしよう。たとえこのことを認めても感覚主義の主張は論理的に不可解なものならざるを得ないというのがジェイムズの第二の論点である。

すでに感覚と知覚とが厳密に分離できない概念であること、両者の違いはただ相対的なものであるというジェイムズの見解を論じてきたが、このことはさらに感覚に対し伝統的認識論が押し付けてきた別の側面に関する根本的な見直しを迫ることになる。

「悟性のない感性は盲目である」というカントの主張を引き継いだ合理主義の文脈に属する心理学者は感覚を外界から心を触発してくる雑多な印象の集合体であると見なしてきた。そのような印象の一つ一つを取り出してみてもそれ自体では何の知識をも構成しない。その意味をくみ取るためにはそれらの感覺群を悟性のレベルにまで高め、そこで感覚の要素を分類し、取捨選択した上で、相互に關係づけ再び心が理解できるように形に総合してやらねばならない。そうなる悟性または理性に経験を超越しながら、経験に逐次適合した意味づけを与えるア・プリオリな能力または機能を前提せざるを得なくなる。こういったいわゆる主知主義的な傾向は、たとえ心理学が基本的に経験的実証の方法に従うべきことが合意された後の時代においても、形式や表現を変えさまざまな形で登場してくる。ジェイムズはこのような合理主義的なア・プリオリズムに対して本能

的と呼べるほどの鋭い嗅覚と嫌悪感を抱いていたので、感覚をそのような観点から規定しようとする傾向についても、その論理的矛盾を突き、根底から論駁しようとする傾向も立ち向かって行ったのである。

以下において我々は当時の心理学に登場した主知主義的傾向を持ったいくつかの感覺理論を順次概観していく。どれもジェイムズが『心理学原理』の感覺論のうち、かなりのスペースをさいて検討を加え、徹底して反駁しようとした当時の代表的な感覺論である。これによって我々は感覺論に反映された心理学に対するジェイムズの根本的姿勢をより具体的な角度から取り上げることが可能となるだけでなく、ジェイムズが当時の主要な心理理論を批判した上でどこに自らの独創的な境地を見いだそれをはしたかをより明確に把握することができる。

### 二・一 対比効果に関するふたつの見解

当時、感覺的経験は同時に心に生じている他の感覺的経験によって、質的にも量的にもさまざまな変化を蒙るということは多くの心理実験でも確かめられ、疑いのない心理学上の事実であった。この事実の最も典型的な例として、色彩感覺の変化を扱ったものに「対比の効果 (effects of contrast)」がある。この対比効果に関する視覚実験は当時最も盛んに行われた心理実験のひとつでもある。興味深いことはこの現象に関する当時の心理学者の解釈が大きく二つに分かれており、しかもそれら二つの見解が心理学研究そのものに対する極端な二つの見解を代表していることである。

対比の効果は例えばメイヤーの実験 (Meyer's experiment) として知られている次の心理実験により、典型的に示すことができる。

赤色の紙の上に灰色の紙の小片をおき、さらにその上を半透明の白紙で覆うと灰色の小片は地の赤色の補色、すなわち緑色を帯びて見える。同様に地の色が青ならばそれは橙々色を帯びて見える。ジェイムズはこの対比の法則を次のように定式化している。

一般にある対象の色調と明るさは、見かけ上それと同時あるいはその直後に与えられた他の対象の色調と明るさに影響を与え(6)る。

この対比の現象は、感覚が対照と比較によって影響を蒙ることを示す重要な証拠と見なされてきた。感覚的経験は知覚と異なり、対象に関する直接的な経験であって、他からの影響を蒙る以前の源初的な内的経験であると規定していたジェイムズは、対比効果の例がそのようなジェイムズの主張と決して相矛盾するものでないことを示す必要があった。

古くからこれらの対比現象に関してはさまざまな説明の試みが行われてきた。ジェイムズはそれらの説明を大きく二つに分け、それぞれ「心理学理論 (psychological theory)」「生理学的理論」(physiological theory)と呼ぶ。そして前者についてはヘルムホルツ (Hermann Ludwig Ferdinand von Helmholtz) の説を、後者についてはヘリンク (Edward Hering) の説を代表的見解と見なし、詳細な検討を加えている。

ヘルムホルツは対比効果の現象を我々の判断上の虚偽であるという。日常一般に我々は外的刺激に対し、それが実際的な意味を持つ

その限りに関心を抱く傾向がある。その際、我々の主要な関心は対象を認識することであって、対象の正確な色調であるとか明るさなどには、必要のない限り特に注意を払うことはない。しかし複数の対象が近接して存在している場合、しかも両者が一見して相互に類似している場合には、それらを区別して認識するため、我々は両者の色調や明るさの差を実際より大きくみず傾向をもつ。同様にサングラス等で外を眺めた場合、そのガラスの色で外界の対象の色は実際に変容を受けているにも関わらず赤色のりんごは赤、青い海は青と見える。それは、ヘルムホルツによると、サングラスのような仲介物を通してものを見る場合、その仲介物の色をあらかじめ酌量し、それが異なった色に変化させている分だけあらかじめ矯正を施して対象を見る習慣が身につけているからだという。これと同じように、上の色紙の実験では半透明の紙によって地の色が和らげられることにより、我々の心はあらかじめ地の色が灰色の小紙片の上にもうっすらと広がっていると信じこんでしまう。そのうえで、その小紙片の色を判断する場合、我々はいつもの習慣に従い、その上に広がっているはずの地の色を無意識的に酌量しようとする。その結果、我々には実際には灰色であるはずの小紙片の色から地の色を差し引き、それがあたかも地の色の補色を帯びているように見えてしまうのである。要するにヘルムホルツに代表される心理学理論では、対比による色調、明るさの変化は感覚器官上の変化でも感覚上の変化でもなく、誤った解釈を生み出したいわば無意識の推論上の誤りであるとされるのである。

それに対してヘリンクをはじめとする生理学理論の支持者達は、

これらの対比現象がすべて視覚に関わる末端神経部分で生じた純粹に生理学的な反応に基づいていると主張した。ヘリンクによれば、

いかなる視覚感覚も神経機構上の生理学的なプロセスと直接に関連している。対比現象はヘルムホルツの主張するように無意識の推論による誤った判断が原因で生ずるのではない。ある対象について視覚を得る場合、心は網膜上の各々の神経末端部分の興奮をそのまま感覚として生じしめだるだけでなく、感覚が生ずる以前の段階で、神経末端部での神経流相互の作用により変様が加えられた神経興奮を視覚感覚として生ぜしめる場合がある。ヘリンクは対比現象とはこのような網膜上の神経末端部での相互作用に基づく純粹に生理学上の変化が原因で生じた感覚経験であると主張するのである。

ヘルムホルツにとって感覚とは外界の対象がそのままの形で心と与えられる単純な内的経験である。それは心のより高次の機能、時には無意識の推論を介して変容され、解釈されてはじめて認識の対象となる。ところがヘリンクにおいて感覚は感覚経験以前の神経のプロセス、つまり感覚が与えられる生理的な状況によってのみ変容を蒙る。それゆえヘリンクは対比効果で感覚に変容が加わり、ときに対象の色調に関して間違つた感覚を生ずるようになるのは、高次の心理学的なプロセスに原因があるのではなく、それ以前の生理学的なレベルで神経流が変容されているからだと考える。つまりこのようなヘリンクの説をとることにより、感覚は外部からの刺激によって生じた神経過程の直接的な反映であるとみるジェイムズの主張は裏付けを得ることになるのである。

このような両心理学者の主張は一見するとともに正しい側面をも

っているように思われる。しかしジェイムズはヘリンクの生理学的説明の方がより正確に実際の現象を説明していると考ええる。なによりもヘルムホルツの場合、対比効果が生じるのは、あらかじめ心が灰色の紙片の上にも地の色が広がっていると我々が「無意識に」信じている場合である。しかしヘリンクが実際に試みたように実験の設定をさまざまに変化させることによって、被験者が必ずしも灰色の紙片の上に他の色が広がっているとは信じ難い状況を作り出すことができる。それでもそのような二色が互いに接するところでは同じような対比効果が観察される。この事実はとりも直さず、我々の信念が我々の感覚神経に直接的な影響を及ぼすことはないということを意味している。このように実験による裏付けによっても、ジェイムズは生理学説の解釈の方が正しいとみなすべきだと結論づけているのである。

## 二・二 感覚の投影説

上でみてきたように、ヘルムホルツに代表される主知主義的傾向をもった心理学者は、感覚を心に直に現れる経験であるとは考えず、いわば外界の対象の延長上にあるものとみなしていた。彼らにとって感覚の所与はさまざまな高次の心的機能の変容を受け、構成されて初めて意識の内容となるのである。一方、このような心理学的見解の対極には、全ての感覚は本来主観的、内在的な存在であり、それが後になって我々の心の特殊な作用により外界の事物に対応する心的内容として「射出 (extradition)」または「投影 (projection)」されるのだという見解がある。このような見解をジェイムズは「感覚の投影説 (eccentric projection of sensation)」と呼ぶ。当時その

見解を代表する心理学者として、ジェイムズはラッド (George Trumbull Ladd) を挙げている。

感覚は、それが存在の場を持つといえるならば、心をその場とする心の状態である。これらの感覚を単なる精神的状態から身体表面に位置する身体的な過程として、あるいは身体外の空間に存在する事物の性質として移行させるのは精神の働きである。

これに対してジェイムズは投影説にはそれを支持する何の証拠も存在しないという。この投影説は感覚がもともと一切の空間的要素を欠いているとの見解を前提としている。ジェイムズにとってそのような前提は全く理解できないばかりでなく、我々が実際に感じていることはまったくの正反対であるという。

ジェイムズは我々の初期の本能的で未発達の意味はそれ自体で客観的であると主張する。そのことを説明するためジェイムズは痛み  
の感覚を例に出す。痛み  
の感覚は最初から空間に存在する客体的なものとして感じられ、それゆえ身体は痛みを回避すべく自動的な反応を起こす。つまり感覚とは心の内面ではなく、徹頭徹尾、身体はどこかに位置づけられたものとして存在するのである。

逆に感覚がもともと身体の内奥に存在し、それが心の作用によって外的世界に投影されるという見解は心と物とのカテゴリーを混同したために生じた錯誤である。心や意識についてそれがどこに位置するのかという問いはそもそも立てることのできない問いである。

確かに意識は脳ときわめて密接な関係にあり、一般に脳を心の座とみる傾向は強い。しかしこのような関係が必ずしも心の物理的な存在位置を決定するわけではない。物のカテゴリーをそのままのカテゴリーに当てはめることはできないのである。結局感覚が脳あるいは神経組織と同じ場所に存在するという主張は、論理的にも経験的にも全く根拠のない前提であるとジェイムズは主張する。

投影説に伴うもうひとつの、そしてさらに重要な問題点は、感覚がそれ自体として外的対象との位置関係をはじめから内包しているわけではなく、そのような関係は後から、心のより高次の機能によって与えられるのだとみなしている点にある。もし本来感覚が心の内部にしか存在せず、それが投影される身体上、空間上の位置は心の機能が後から指示するものだとすれば、投影された位置が実際に感覚を生じさせた原因、例えば痛みを引き起こした針の位置と一致するためには、無意識に行われる推論が常に正しくなければならぬということになる。

これに対してジェイムズは現実の過程は上記の説明と順序が全く逆であるという。実際には感覚がまず存在し、それはもともと身体と一体である。感覚が生ずるとは本来それが身体上で生起するということを含意している。

我々が痛みを身体上に位置づけるということと、身体をその痛みへと位置づけるということとは、どちらか一方がより真実に近いという問題ではない。それらは共に真実である。つまり痛みとは身体という言葉で我々が意味していることの一部なので

(8)  
ある。

そうだとすれば、心は感覚を後から身体上に位置づけてやる必要などない。身体上の位置は感覚の生起と同時に心にもたらされた最初の空間概念であり、客観的な空間概念とは、感覚が身体上に生じた源初的な空間概念が次第に発達、拡張され、ついに一貫した体系性を持つに至った一種の理念的な概念なのである。ジェイムズはその変遷を次のように表現している。

これら可能な感覚のシステムは徐々に実際に生起した感覚のシステムに取って代わって行く。「上」「下」という表現は主観的なものとなり、東と西は「右」「左」などよりもより「正しい」表現となる。そしてついに事物は身体あるいはそれによって最初に場所が定められた事物との関係によってよりも、ある理念的で固定した座標との関係によって、より「真実に」位置づけられて行くのである。(9)

ジェイムズは感覚がこの空間上に位置づけられるために、悟性のような心の高次の機能が必要としないことを示そうとした。先の対比効果の場合と同じように、主知主義者は単なる所与としての感覚が空間的な位置を獲得するためには、悟性からの介入が必須であると主張した。しかもその悟性からの介入は大概無意識の状態で行われるものとされる。そもそも意識されない過程を心理現象であると規定すること自体、心理学概念の定義からして自己矛盾を含むも

のであるが、心理学者はしばしば生理学的な説明の思いあたらないところで「無意識の推論」を持ち出し、不十分な点を補おうと試みる。しかしそれは説明を性急に求めるあまり真実から目をそらし、心理学の根本精神を見失ってしまうことにもつながる。そのような態度を維持するかぎり、心理学は自然科学としての道を自ら閉ざすことになる(10)とジェイムズは警告するのである。

### 三 感覚の認知機能

これまで我々はジェイムズがヘルムホルツやラッドといった当時の心理学界を代表する心理学者の感覚論に対して、どのような批判を加えてきたかについて検討してきた。彼らの感覚論は第一に感覚をそれ自体では何の認識能力をも持たない外界からの単なる入力データと見なし、第二に感覚与件から対象の性質や位置に関する認識を構成するのはより高次の悟性能力であると考える主知主義的な傾向を帯びていた。

ジェイムズの時代に隆盛した主知主義的傾向の強い感覚論は、ハートリイ (David Hartley) からミル父子に代表されるような経験主義に極端に傾いた感覚論に対する心理学者たちの一種の反動と捉えることができる。(11)しかしジェイムズはそれが拠って立つ基本的な認識論の構図はそれ以前の合理主義哲学のそれと根本的に変わっていないことを看破していた。ジェイムズのとった道は抽象的で理論上の虚構物でしかなかった「感覚」観から、我々が現実を経験しうる限りでの感覚へ立ち戻ることによって、経験主義に則った新しい感覚論を創り出すのであった。



感覚は知覚のように対象に關しての明確で確定的な認識を与えてくれるわけではない。しかしそれは対象について概念化される以前の直接的な認知を我々にもたらしてくれるとジェイムズは考える。我々はそのも感覚を通じて無数の事物、事柄に馴染むようになる。いったん感覚を通じて得られた事物についての馴染みの感じは、いかなる表現を尽くしても、決して概念的な知識によつてはもたらされ得ない根源的な対象認識を我々に与えてくれる。ジェイムズは感覚の持つこのような概念的知識以前の認知機能のことを「直接知」(knowledge-by-acquaintance)と呼んでいる。ロックの有名な生まれの盲人、聾啞者のたとえにあるように、全く見たこともない色彩、全く聞いたことのない音色は、いかなる悟性の力、概念的な知識をもつても生み出すことはできない<sup>12)</sup>。また逆にいかに理論体系が概念的にしっかりしていようとそこで指し示されるものが感覚を介して直接に与えられない限り、我々はその理論の信憑性に充分な確信を抱くことはできない。ジェイムズは次のようにいう。

感覚による直接的知識を欠いた概念的知識の体系は橋脚のない橋と同じである。事実についての(知識の)体系は橋脚が岩盤に足場を持つように感覚のうち足を下ろしてはならず、なくてはならない。感覚とは思考がそこから出発し、そこへと回帰していく安定した岩盤なのだ<sup>13)</sup>

この概念による知識(knowledge-about)と感覚による直接的知識との関係のことをジェイムズは後に「相補的(complementary)」な

關係と呼んでいる<sup>14)</sup>。両者が相補的であるとは、概念がそれだけでは決して実在の本当の姿を教えてくれず、感覚はそれだけでは我々をさらに遠い新たな実在へ導いてくれることがないということを、つまりお互いにそれだけでは我々の生を十全に全うさせる機能を持っていないことを意味している。すなわちこの両者が互いに依存し、支え合うことによつてはじめて、我々は世界をその実在の深みにおいても、またその可能性の広さにおいても知ることができるようになるのである。ここにおいて我々はジェイムズ哲学における(感覚偏重ではない)感覚重視の思想が打ち立てられていることをはっきりと見てとることができる。それは当時の主要な心理学理論を十分に検討し、悟性機能を重要視した感覚論を批判することにより、自ら真に納得のゆく感覚論を打ち立てようとした試みの中で生み出されてきたものだといえよう。

このような感覚に対するジェイムズの思想は、感覚をそれ自体では何の認知機能も持たない抽象的な心的要素とみなす主知主義の心理学者の主張と比べれば、直観的にも馴染み易いものである。しかし反面、感覚には概念的な秩序以前の原初的認知機能が存在するというジェイムズの主張にも何か神秘的で、自然科学としての心理学の理念にはそぐわない個人的な臆見が含まれているように思える。もしそうだとすればジェイムズの感覚論は心理学を独立した自然科学の一分野とするため、従来の心理学理論に内包されていた形而上学的前提をできるかぎり除去するというジェイムズ本来の目的の達成を内部から崩壊させることにもなりかねないのではないか。最後にこのようなジェイムズの感覚論が彼の心理学全体のプログラムの

中でどのように位置づけられるのかを論ずることにしよう。

#### 四 進化論的心理学の理念と感覚

今日に至ってもジェイムズ心理学が読者の心を引きつけてやまないのは、それが気取らない散文調の文体をもって書かれていること、他、それが一方で科学としての「心理学独立宣言書」と呼ばれるくらい強く科学的な側面を全面に打ち出しているにもかかわらず、他方で読むものの直観や感性に深く訴えかける生命の神秘、精神活動の靈妙さをうまく得たレトリックで表現していることにある。本来あまり馴染まないはずの両側面がジェイムズ心理学の中でうまく調和しあっていることがその尽きせぬ魅力の源となっているのだろう。しかしそれがジェイムズの主張をできるだけ明確に突き詰めたいと思うものの心を押しとどめ、ジェイムズ本来の主張をほやかしてしまふ場合がある。確かにジェイムズの実験論にもそのような側面を見出すことができる。ジェイムズが感覚的経験に認めた源初的な認知機能を、文字どおりの意味にとるならばそれはあまりに曖昧で、とても科学としての心理学の基礎概念たる資格をもちえるようには思えない。このようなジェイムズの叙述をどのように解釈すればジェイムズ心理学の理念に一貫性を保持させることができるのかが問題となってくるのである。

このアポリアを解く鍵は感覚における対比効果及び投射説を反駁した際のジェイムズの主知主義批判の中に既に現われている。ジェイムズは、ヘルムホルツが対比の効果の説明する際に無意識の推論

を持ち出したことを批判し、ヘリンクとともにそれらの現象はすべて生理学の現象として説明されるべきであると主張した。ラッドの投射説に対しても一貫して同様の批判を行なっている。一見いかに不可思議で巧妙に思われる感覚経験であろうとも、それはあくまで生理的なレベルでの現象、すなわち脳と神経系とが繰返す複雑な神経過程の因果的な結果であるとジェイムズは主張した。このことはジェイムズが次に述べていることから明らかである。

たぶん誰も、が、これらの全ての事実を説明するのに最も良い説明は生理学的説明であると同意するであろう。つまり最初の感覚による脳プロセスは強化されるか、入ってくる他の神経流によって別の形に変容されるのである。このことに関しては誰も心理学的な説明をとりとうとはしない。私にとって、多数の刺激に対する心的反応の全てのケースがこの場合と同様であるに違ひなく思える。そして生理学的説明こそいかなる場合であれ、最も単純で、最良なのである。<sup>15</sup>

ここである感覚的経験を引き起こしたのが生理的な神経過程であるとしてもジェイムズが感覚そのものが生理的現象であると主張しているわけではないことに注意しておきたい。ジェイムズが主張するまでもなく、感覚はそれ自体れっきとした心理現象である。ただしジェイムズにとって感覚とは脳における神経活動の直接的な結果であり、感覚を引き起こす原因となり得るのは感覚でも、悟性でもなく、ただ脳を含めた神経系の因果的条件のみである。この神経組

織はさらに身体の運動機能とも直接結合しているため、痛みの発生した場所にすぐさま手が当てがわれたり、光のまぶしさに自然に眼球や瞳孔が反応するといった反射や本能的行動は高次の悟性活動とは無関係に生起することができる。つまり感覚は神経機構との因果連関を媒介として身体とかわめて密接な関係にあるわけで、ジェイムズが感覚が生じた最初の瞬間から感覚は世界についての直接知を持っているというのも、それが神経系を媒介として身体およびその環境と緊密な関係を維持し続けているからに他ならない。感覚とはその意味でこの世に意識が生まれる以前から生物が絶えず世界の諸物と関わりあい、ときには重大な危機にさらされながら身体上、神経構造上に蓄積してきた身体の知識、あるいは体得された知識の反映であるということができるのである。

「心的生活の諸現象とその現象の諸条件との科学」となるべく出発したジェイムズ心理学は当初から進化論を前提として出発した。つまりジェイムズはそれまで一般的に考えられていたように心理学を単に「意識とその内容に関する学問」としてではなく、心的現象に加えてその先行条件および後続条件として関係する身体上の変化、神経生理プロセスをも含めた全体的な観点から心を捉えていくべきだと考えたのである。このような心理学の傾向はジェイムズの後、ジェイムズの学生の一人であったエンジェル (James Rowland Angell) らによって「機能主義心理学 (functional psychology)」と呼ばれるようになったが、その意味でジェイムズはアメリカにおける機能主義心理学の先駆者でもある。しかしながら心と身体とは概念的にも経験上からも全く異なったカテゴリーに属しており、その

ため一般に両者は全く異質な法則に従っていると見なされてきた。そうである限り心を対象とする心理学と物質を対象とする自然科学とはともとも異質な存在領域を扱う根本的に異質な学問でしかないことになる。ジェイムズ心理学はそのような伝統的心身二分法に則った心理学に対する挑戦であった。

この挑戦のきっかけを作ったのはいうまでもなくダーウィンだったが、それを心理学の一般理論として初めて定式化したのはスペンサーである。ジェイムズの立場はさまざまな点でスペンサーと異なっており、スペンサーの思想を克服したところにこそジェイムズ心理学の面目躍如たるところがあるわけだが、少なくとも進化論的見地を広く心理現象にも適用すべきと考えた点では両者は一致していた。

概して最近の定式化のうち、心的生活ならびに身体的生活の本質は一つである、すなわちそれは「内部関係の外部関係への適応」であると述べたスペンサーの定式ほど、おおまかにではあるが真に心理学に貢献したものはない。このような定式化は曖昧そのものである。けれどもそれは、心は環境の中に住んでおり、環境は心に作用し、心は環境に反作用するという事実を考慮するがゆえに、簡単にいえば、心をすべての具体的関係のまっただなかにおいて捉えるがゆえに、靈魂を自己充足した現実離れた存在として扱い、ただその本性と特性のみを考慮しようとした旧来の「合理主義的心理学」よりはるかに豊穡なのである。<sup>(18)</sup>

ちて、上述の進化論心理学の根本理念に照らし合わせて鑑みた場合、ジェイムズの感覚論はいかなる意義を担っているのだろうか。

感覚的経験とは心が環境と直接接触することによって生ずる源初的な心的反応に他ならない。さらに高次の心的機能、世界についての概念的知識はすべてこの感覚的経験から生起して、そこに根をしながら、さらに新しい感覚的経験へと我々を導きつつ、その翼を広げていく。逆に身体レベルから見れば、感覚とは身体が環境から与えられる神経生理的な変化によって引き起こされる最も直接的な心理現象である。感覚は身体的な変化の一部と直接的な因果関係の内にあるといってもよい。それゆえ感覚の種類、強度、質といったものは生物の身体的条件に全く依存しているのである。それと同時に感覚は有機体の身体が意識以前のレベルで環境との間で相互に影響を及ぼしつつ長年の間に獲得してきた世界との馴染みの関係を反映するものでもある。感覚はその意味で身体及びその延長線上にある環境世界と悟性による「概念知」との間の媒介として機能していることになる。環境との相互作用の中で生きている人間存在という観点からみた場合、感覚こそまさにしく心理現象と身体現象とを結びつけるジェイムズ心理学の試みの根幹に位置するものといえることかたぎる。そしてその認識を通じて、ジェイムズは伝統的な哲学・心理学の枠組みの中で正当には扱われてこなかった感覚の意味を再び本来の地位にまで引き上げようとしたのである。

## 注

(一) James, William, *The Principles of Psychology*, Boston :

Harvard University Press, 1981, vol. II, pp. 658-9.

(2) *ibid.*, vol. II, p. 651.

(3) *ibid.*, vol. II, p. 691.

(4) James, William, *Psychology: Briefer Course*, Boston : Harvard University Press, 1984, p. 139.

(5) *cf. ibid.*, vol. I, p. 156-160; *ibid.*, vol. II, p. 652 n.

(6) *ibid.*, vol. II, p. 662.

(7) *ibid.*, vol. II, p. 678.

(8) *ibid.*, vol. II, p. 682.

(9) *ibid.*, vol. II, pp. 682-3.

(10) *cf. ibid.*, vol. I, pp. 165-177.

(11) *cf. Hymlin, D. W., Sensation and Perception*, London : Routledge & Kegan Paul, 1961, pp. 158-172.

(12) *cf. Locke, John, Essays concerning Human Understanding*, bk. II, ch. II, § 2; James, William, *op. cit.* vol. II, p. 656.

(13) *ibid.*, vol. II, p. 656-7.

(14) James, William, *A Pluralistic Universe*, Boston : Harvard University Press, p. 112.

(15) *James op. cit.*, vol. II, pp. 677-8.

(16) *cf. Angell, J. R., "The Province of Functional Psychology"*, *Psychological Review*, vol. 14, 1907, pp. 61-91.

(17) 進化論的な観点からの心理学理論を捉え直そうとした当時の哲学者の一人としてチャウンシユ・ライートの名前を上げないわけではなかったらう。ライートの功績はジェイムズ・ペーヌス・デ

ユーイら当時のプラグマティスト達に大きな影響を及ぼしただけでなく、進化論的色彩の強いアメリカ独自の心理学である機能主義心理学を生み出す大きな原動力にもなった。cf. Edward H. Madden, *Chauncy Wright and the Foundations of Pragmatism*, Seattle: University of Washington Press, 1963, pp. 137-142.

(81) James, William, op. cit., vol. 1, p. 19.

(よしみね・のりかず 筑波大学大学院哲学・思想研究科)